実践活動「あそびの森」の総合的検証（１）

－保育者の力量形成の成果と課題－

古里　貴士・三羽佐和子

Ⅰ　はじめに－「あそびの森」の保育者養成上の目的と本稿の課題－

本稿は、東海学院大学短期大学部（以下、本学）が東海学院大学と共に取り組んでいる地域の親子対象の子育て支援プログラムである「あそびの森」を、短期大学（以下、短大）における保育者の力量形成という観点から検証し、これまでの成果と課題について明らかにすることを目的としている。

短大は、学校教育法第108条において「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は実際生活に必要な能力を育成すること」を主な目的とするよう定められている。大学の目的が「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」(学校教育法第83条）に置かれていることと比較してみると、短大では職業生活や実際生活の中で実践的に活用できる能力の育成に力点が置かれていることが明確となる。

短大が実践的力量の形成を求められているのは、保育者養成の場合においても同様であり、２年間という短期間の中でいかに実践的な力量形成を行いうるかが課題となっている。

本学では、2004年度より地域の親子を対象とした子育て支援プログラム「あそびの森」を実施してきた。本プログラムの理念は、地域の親子にさまざまな遊びを提供し、親と子が共に育つ機会を提供することにある。また、遊びを提供することを通じて、学生が保育者としての力量形成を図る機会とすることが、本プログラムでは目指されている。

本学では１年の後期からゼミに配属になり、卒業まで同一のゼミに所属することになる。本プログラムの遊びの提供はゼミ単位で行っており、ゼミの学生全員参加の形をとり、「あそびの森」の当日は、司会進行からあそびの提供まで全て学生が行っている。

本稿では、2010～12年度における三羽佐和子ゼミの取り組みを事例に、あそびの森が学生の力量形成にとっていかなる機会となっているかを、「あそびの森」に参加した学生の振り返りを基に考察したい。本稿では学生による感想用紙を素材として力量形成について考察しているが、感想用紙のみに依拠して、いかなる力量が形成されたかを詳細に明らかにすることは困難である。そこで本稿では、「あそびの森」が力量形成をしていく上でいかなる機会を学生に提供したのかを明らかにするということに、課題を限定したい。

三羽ゼミでは１年に２度のプログラムを実施しており、学生の立場から見ると（１）実習前の１年後期に２年と合同、（２）実習を体験し２年のみで実施、（３）さらなる実習を体験し１年と合同という三度を体験することになり、学生に質的に異なる機会を提供していると考えられる。よって、本稿では体験時期と力量形成の機会との関わりに注目したい。

保育者の力量と一口で言っても、その中身はさまざまな要素から成り立っている。本稿では、仮説的に、保育者の力量の要素を（１）幼児の行動や心情に対する理解である「幼児理解」、（２）計画・実践・反省する力や環境構成の力からなる「保育をつくる力」、（３）保育者としてのふるまいなどに関わる「保育者としての有り様」、（４）共同で保育を行う「チーム保育」の力、（５）保護者との関わりに関する力の五つに腑分けした。以下では、Ⅱで三羽ゼミの３年間の実践の中で代表的な実践事例の紹介を行った後、Ⅲで五つの要素に従って学生の感

想を整理する。そして、Ⅳで、体験時期と力量形成との関わりについて時間軸に沿って分析し、「あそびの森」の成果と課題についてまとめることにしたい。その上で、Ⅴでは今後の研究課題について整理したい。

Ⅱ　2011 ～ 12 年度「あそびの森」の概要

1．2年生と一緒に行う

活動名「わらべ歌やゲームを楽しもう」

実施日・会場

平成 23 年 12 月３日（土）保育実習室

AM 10:00 ～ 11:45　PM 13:30 ～ 15:15

ねらい

・子どもたちと一緒にリズムに合わせて，歌ったり踊ったり体操をしたりして，共に楽しく遊ぶ。

・２年生の動きを参考に，自分なりに「あそびの森」の流れや，保育者としてどのように動くとよいか等を考え，行動することができる。

担　　当　三羽　佐和子

参加人数　参加家族 33 組

（子ども 56 名／保護者 36 名）

参加スタッフ　教員５名　学生 35 名

＜内容＞

・リズム遊び（バスに乗って･なべなべそこぬけ･花いちもんめ・あわぶくたった）をする

・歌・絵本の読み聞かせ・体操・手遊びをする

＜遊びや学生の様子＞

○「バスに乗って」は１年生が「出張あそびの森」として，岐阜市女性センター主催のハッピーデイで行ったものを取り上げ，１年生主導で行った。リズムに乗って，親子の触れ合いを十分に楽しめた。

○「なべなべそこぬけ」は，最後に全員で大きな輪になったことが楽しかったようで，全員で顔を見合わせながら歓声と大きな拍手が湧き上がった。

○「あわぶくたった」は，狭い部屋での鬼ごっこだったが，子どもたちは，狼役の親や学生から逃げて楽しんでいた。なかなか捕まらない子もいたが，子どもがスリルを楽しめるように，学生はわざと捕まえないようにして追っかけるなどの工夫をしていた。

○「花いちもんめ」は互いに知らない親子が出会いグループを組むので，名前がわからない。そこで学生が動物のお面を作り，各親子に渡し，名前を呼び合う部分で、かぶっている動物の名前を呼び合う工夫をしたので，遊びがスムーズにできた。

○「あわてんぼうのサンタクロース」の歌は，歌詞を書くのを１年生が担当。ピアノと歌のリードは２年生が行っていた。うまく分担をしていた。

＊絵本の読み聞かせに真剣なまなざし

＜総括反省および考察＞

○前々週の水曜日に１年生に教えるつもりで，２年生が遊びを行い，前週にもリハーサルを念入りに行ったこともあって，比較的スムーズに進んだ。そのとき，それぞれの役割分担が明確にできたし，グループでの話し合いが２年生中心になされたので，目的意識を持って仕事を行っていた。１年生の学びも大きかったと感じる。

○午前の終了後反省会をし，それぞれ午後への課題をはっきりさせた。その結果，学生もその反省点や課題を意識し行動したことで，午後はスムーズに行えたし，学生も子どもも親もみんなが楽しめたようだ。保育は反省が大切でそれを活かすことが、よりよい保育に結ぶつくことを身をもって感じたと思う。

○親子での触れ合いを多く取り入れた遊びを子どもたちに経験させたいと，学生たちがこのプログラムを組んだが，殆どの親が積極的に参加し，十分に子どもと接することができた。きょうだいがいる子については，親の代わりを学生がしていたが，学生も子どもたちと直接触れ合

うことができ，よい経験となったと思う。
○「あわぶくたった」では，狭い保育実習室での鬼ごっこだったので，逃げるときの衝突や，すぐに捕まってしまうことが課題であった。そこで“親が自分の子どもを捕まえる”という方法を考えた。それにより課題を解決できたと同時に，日頃親子で鬼ごっこをする経験が殆どないためか，「自分の子がこんなに素早く逃げるのに驚いた」という親の言葉や，子どもたちの嬉しそうな表情見られ，印象的だった。
○最近子どもたちだけでなく学生もわらべ歌遊びの経験が少ない。日本の伝承遊びをぜひさせたいと今回学生に提案した。子どもたちに指導するためには，学生自身が遊びを十分に知ったり遊んだりする経験が必要である。準備の段階でさまざまなわらべ歌遊びを調べたり，やってみたりした。この経験が今後に活かされると思う。

２．自分たちだけで行う

活動名「スライム等で感触遊びを楽しもう」
実施日・会場
　平成 24 年５月 26 日（土）保育実習室
　AM 10:00 ～ 11:45　PM 13:30 ～ 15:15
ねらい
・グループごとに相談して，楽しめそうな手遊び・体操・絵本などを選び，子どもたちが喜んで参加できるように工夫する。
・スライム・小麦粉粘土の遊び方を知り，ねらいや子どもたちと共に楽しめる方法を考え実践する。

＊こーんなにのびるよ

担　　当　三羽　佐和子
参加人数　参加家族 52 組
　　（子ども 91 名／保護者 56 名）
参加スタッフ　教員６名　学生 22 名
＜内容＞
・スライムや小麦粉粘土で遊ぶ
・手遊び・体操・絵本の読み聞かせ等をする

＜遊びや学生の様子＞
○昨年の「あそびの森」での経験は２年生が主体となり，１年生はついて回りの立場であった。しかし，今回は自分たちだけで計画から実行まで行う立場になり，緊張している様子が見られた。しかし，遊びが進むにつれて，緊張感が少しずつとけていく様子が見られた。
○子どもたちは，最初母親と遊ぶ姿が多かったが，学生の方から話しかけたり，ボールを投げたり，ブロックを組み立てて見せたりすることで，だんだん学生と遊ぶようになった。
○スライム・小麦粉粘土遊びをした。学生は前年度の大学祭で，子どもたち相手にスライム遊びを行ったので，遊び方やポイントを掴んでいた。その経験があって説明がうまくできたので，子どもたちも遊びのことをよく理解し，すぐに取り組んだ。
○スライムを作るとき，ヌルッとした感じから，ゲル状に大きく変化するところで，子どもたちは歓声をあげ，学生たちも子どもの様子を見ながら一緒に興奮していた。
○絵本読みや手遊びや体操，遊びの説明などは，２～３人のグループを組んで，互いに助け合って行う姿が見られ，子どもたちも喜んでそれぞれの活動に参加していた。

＜総括反省および考察＞
○ 子どもと最初に出会って自由に遊んでいるとき，学生は子どもを無理に自分の方へ引っ張って遊ぶのでなく，子どもの思いを受け入れて遊ぼうとしていた。２回の実習で自信をつけ，子どもと気軽に接することができるようになった結果であると思う。
○スライムや小麦粉粘土遊びは比較的スムーズに流れた。何度も学生と打ち合わせやリハーサルを行ったことと，準備をしっかりした結果だと思う。特にリハーサルの時間を十分にとったことで余裕ができ，それが学生の自信となった

ようだ。
〇小麦粉粘土の水の分量が難しく，ベトベトになったりしたが，学生は小麦粉を足して切り抜けていた。失敗も学生にとっては大切な経験であるし，臨機応変に対応することは，今後保育者になったとき必要な力となると考える。
〇手遊び・本読みは，リハーサルで練習した以上のできばえであった。やはり，子どもたちの反応があり，やりやすいことと，意気込みの違いであろう。学生の自信に繋がったと感じる。
〇学生の反省文に「体操をするときには，大きな振り付けに心がけたので，子どもたちはわかりやすかったようだ。また，次の動作をする前に，何をするかの声掛けをしたこともよかったようだ。」「スライムは汚れないように靴下を脱がせておいたことと，ブルーシート内で遊ぶよう声をかけたことで，子どもたちがそんなにあちこち汚すことなく遊べた。細かい指示の必要性を感じた。」という内容があった。このような気付きができることに成長を感じる。

あそびの森　「お話の世界を楽しもう」タイムスケジュール・担当表

担当教員　三羽・古里・川崎・藤井　　平成 24 年 10 月 20 日

１０月２０日（土） 午前時間　午後時間	担当場所・時間	担当者名	
		午前	午後
９：００　１２：４５ ・７号館５階に集合 ・　打ち合わせ ・　準備（遊び・おねむさんの部屋・トイレ・階段） ・　門の内側と７号館に案内看板の設置 ９：４０　１３：１０ 所定場所につく １０：１０　１３：４０ 挨拶 手遊び（学生） １０：２０　１４：００ ペープサート・お面作り 劇ごっこをする １０：５０ 片づけ開始・移動 １１：１０　１４：３５ 手遊び 絵本・エプロンシアター等 体操・ぽんぽん体操 挨拶（三羽）　（三羽） １１：３０　１４：５０ 終わりのことば 参加者帰宅 部屋の片づけ １２：００　１５：３０ 昼食　解散 （昼食は各自で用意） レポートをまとめて帰る	○　**駐車場および案内** ７号館１階玄関（10：30 迄） １階エレベーター前・・案内	A・N T.M T.F・N	T.I・U K N・M
	５階エレベーター前・・案内 入り口　・・・案内	F・Y H	H・N M
	○　**受　付** 名簿チェック・保険料受取 シール貼り・名札付け	N・T M・K A・K	U・T S・Y T・Y
	○　**司会進行**	T・K	H・N
	○　**手遊び**	M・T	Y・A
	○　**ペープサート・お面作り** ・はらぺこあおむし(アンニン) ・七ひきの子ヤギ　(ポッキー) ・大きなかぶ　(ポテチ) ○ **劇ごっこをする** ○ **かたづけ・移動**	H・T Y・K K・N	T・M M・M T・K
	○　**おねむさんの部屋**・荷物係 赤ちゃんのお世話	F・A	Y・N
	○　**ロフト危険防止** 安全確認	T.F・N	K・T
	○　**滑り台危険防止** 安全確認	T.M	U
	○　**楽しみ会（絵本の部屋）** 手遊び 絵本・エプロンシアター等 体操 挨拶・**移動**	S・O 絵　K・T パ　U·H·M·T 絵　I・O S・T	T・H パ 絵本以外全員 エ S・Y 絵 M・T S・Y
	○　**後かたづけ** ・片づけと，午後の準備 ○　**昼食**は７２１教室か１階	全員 （下線付き　四大）	全員

3．計画・実践しながら１年生を指導する

活動名「お話の世界を楽しもう」

実施日・会場

平成 24 年 10 月 20 日（土）

保育実習室・えほんの森

AM 10:00 ～ 11:45　PM 13:30 ～ 15:15

ねらい

・絵本やパネルシアター・エプロンシアターなどの話を子どもたちが楽しく聞いたり，お話の世界にひたったりできるように，プログラムを考える。

・子どもたちがお話を楽しめるように，表情をつけて演じたり，子どもが劇遊びに気軽に参加できるように工夫したりする。

担　　当　三羽　佐和子

参加人数　参加家族 37 組

（子ども 55 名／保護者 40 名）

参加スタッフ　教員５名　学生 35 名

＜内容＞

・お面やペープサートを作って劇ごっこをする

・絵本等の読み聞かせをする。（図書館えほんの森へ移動）

・体操・手遊びなどをする。

＊かぶをぬくのを手伝って！

＜計画・準備の様子＞

１）１回目（10/3）･･･10/20 の「あそびの森」の相談をする。

○１・２年生合同で３グループに分かれ，各グループで２年生が「あそびの森」について概要，親子が楽しく遊ぶために学生が何をするのかを１年生に説明をする。

○テーマが「お話の世界を楽しもう」であることを踏まえ，どのような内容のことをするのかみんなで相談した。その結果，劇遊びやペープサートなどをしたり，読み聞かせを行ったりすることに決定。

○具体的な内容としては，絵本から演じやすいものを選び，ペープサート遊びや劇遊びを行う。また，図書館の「えほんの森」を紹介することも必要なので（親子で今後活用してほしいため），絵本やエプロンシアター･パネルシアターは「えほんの森」の部屋へ移動して行うこととする。

○３グループに分かれ，２年生主導で，劇ごっこに使うお話選びをしたり，役割分担をしたりする。役割分担については，どのグループも１・２年が交じっており，１年生が２年生を学ぶことができるように考えていた。

○劇ごっこ等の内容を決定した。

「はらぺこあおむし（ペープサート）」･･･ あおむしが食べるものをペープサートで作る

「おおきなかぶ（劇ごっこ）」･･･ 登場する動物などのお面を作る

「七匹のこやぎ（劇ごっこ）」･･･ やぎや好きな動物のお面を作る

○次回にどのようなことをするのか，そのための準備は何が必要かを相談した。ダンボール，画用紙，色紙，パス・マジック等の材料や，はさみ，タフテープ，ガムテープ等の用具など準備するものを洗い出し，どのように揃えるかを全員で決めた。

２）２回目（10/10）･･･ グループに分かれ，打ち合わせたりそれぞれ材料用具を持ってきたりして準備をする。

○司会・遊びの説明・手遊び・絵本の読み聞かせ（エプロンシアター･パネルシアター）･体操･受付等の役割を決め，それぞれの役割について打ち合わせをする。

○劇ごっこについて各グループで細部の打ち合わせをしながら，２年生が中心となって指導案を作成。ねらい・指導の流れ・子どもの活動・保育者の配慮と援助・環境や準備するもの等を本学指定の指導案に書き込んだ。１年生に作成した指導案の説明をしたグループもあった。

○段ボールや画用紙等を使って，遊びに必要な小道具（木・おおきなかぶ・蝶々・あおむし・学生用のお面等）を作ったり，子どもたちに作

らせるお面やペープサートの準備をしたりする。
〇劇遊び，手遊び，体操，本読み等の練習をしたり，役割の内容について詳細な打ち合わせをしたりする。
３）３回目（10/17）･･･２回目でできなかった準備を行ったり，リハーサルをしたり，「えほんの森」へ出かけ，場面設定のイメージを描いたりする。
〇本番通りに流れを追ってリハーサルをした。司会役は３グループで交代しながら行ったが，劇ごっこについては１グループずつ，遊びを展開する役と子ども役に分かれ，互いに気付いたところを指摘し合いながら遊びを進めた。
〇３グループで保育実習室をどのように使うかの相談もした。場所が大きくいる「大きなかぶ」は，窓際の遊具のない広い場所にした。「七匹のこやぎ」はドアや隠れる場所が必要という条件で，後方の，ドアがありロフトや滑り台などの遊具がある場所を選んだ。「はらぺこあおむし」は動きが少ないので，残った前方入り口辺りを選んだ。
〇「えほんの森」の開館日なので利用することにし，移動に要する時間を計ったり，どのような経路で行くか等調べたりした。また，部屋のどこに空間を作って読み聞かせと体操ができるかを考え，そのイメージを担当職員に伝え，動かしたい書庫についての相談をした。
４）時間不足で完成できなかった物を作ることや練習については，担当の学生がゼミ以外の時間に集まって行った。

＜当日の遊びや学生の様子＞

〇後期プログラム第１回目ということで，カードに名前を書いて全員に渡す仕事があり，受付係は緊張していたが，経験のある２年生が１年生にどうするか伝え，混乱しないように行っていた。四・短大ともに１年生は，２年生を真似て行っていた。
〇受付で，参加者がどのグループになるのかわかるように，それぞれのグループのカードを用意し，順番に渡した。中には，きょうだいで違うお話がよいと言う子どもがいて，臨機応変に，学生同士が話し合い，別々のグループに入って遊ぶ場面もあった。
〇劇ごっこ等では遊びの説明を受けてから，子どもたちはお面やペープサート等を作り，自分の作ったものをかぶったり持ったりして，学生とともに遊んでいた。
〇狼役の男子学生が勢いにのって，怖いイメージで行ったので，泣いてしまう子どもが出るという，ハプニングが起こった。午後はその反省で少し優しい狼になっていた。
〇子どもたちはごっこ遊びが好きなようで，いつもは学生が提起する遊びに参加せず，ロフト等で遊ぶ姿が見られたが，今回はどの子もお面をかぶったり，ペープサートをもったりして，自分の役になりきって遊んでいた。
〇説明部分で１年生が戸惑い助けを求めるように２年生を見た。すると２年生は出しゃばらない程度に補助する姿が見られた。

＜総括反省および考察＞

〇場所は前半が「あそびの森」保育実習室，後半が図書館の「えほんの森」と変えた。移動時間の問題や参加者が戸惑うかが心配で，事前に経路を調べ，図書館の担当職員と打ち合わせをしたので，参加者は戸惑うことなくスムーズに動くことができた。計画の細かい部分での配慮の必要性を学生たちは学んだようだ。
〇いろいろな場面で１・２年生が一緒に行う場面を作ったことで，共に学び合う姿が見られた。特に１年生は，次回に向け，２年生から様々なことを学ぼうと意欲的であった。中には言われるままに動く学生もいた。２年生は１年生に説明や指導をするために，自分がしっかりすることの必要性を感じていたようだ。
〇午前が終わった後，全体やグループで午後に向けての課題について話し合いを持った。その結果，午後は問題点が解決ようで，どのグループも戸惑いは少なかったようだ。保育は反省が大切なことを学生たちは身をもって学んだ。
〇子どもたちが取り組みやすいように，ストーリーが簡単で親しみやすいものや，演じやすい繰り返しの多い題材を選んだことで，子どもたちが初めてのメンバーや慣れない場にも関わらす，意欲的に楽しめたことにつながったと感じる。また，指導案を立てて行ったことにより，

特に２年生が流れをしっかりつかみ，余裕を持って動くことができた。教材研究や指導案の大切さを学べたと思う。
○移動時間の関係で，劇ごっこは自分のグループの遊びをするだけに終わってしまった。他グループの劇を見せ合うことができればよかったと感じる。

Ⅲ　学生による「あそびの森」振り返り

＜初めての経験・先輩と共に　１年後期＞

１．子ども理解・子どもとの接し方

○子どもの集中力はすごいと気づきました。興味のあることは積極的に見たり聞いたりして，目がキラキラとしていました。その逆で、自分に興味がないことには全然見向きもしないので、子どもは素直で可愛いと思う反面、少し怖いと思いました。(T.Y)
○最初は絵なんか描きたくないと、滑り台の方へ行ってしまい大変だったけど、私が「何が好きなのかな？」とか「みんな上手に描いてるね」とか声をかけたら，少し興味を示してくれました。最初は画用紙一面にぐるぐると描いていたけれど、「ぶどうかな」と聞いたら、次は裏にすごく上手にフルーツの絵を描きびっくりしました。私が思ったのは、場所の雰囲気に少しなじめなくて、きっとそわそわしていたのかなと思いました。(N,Y)

※初めて子どもと遊ぶ経験をし，子どもの特性に気づき始めたようで、実習前に子どもを理解するよい学びであった。

○お母さんの許可を得て８ヶ月の乳児を抱っこさせてもらいました。人見知りをしない子で、私が抱っこしても泣きませんでした。授業で習ったことを思い出し、手や顔に触れてみると、私の髪の毛を引っ張ったり指を握ったり、私の指を口の中に入れたりと教科書どおりに反応が返ってきたので、とても面白かったです。(N.E)

※「 あそびの森」で親子と接することを通して、教科書で学んだことを実際に経験することができ、授業と実践とを結びつけるよい機会となった。

２．担当した役割・保育者としてのあり様

○司会をやりました。どんな言葉がけをして子どもを引きつけるかということが課題でした。小さい声ではいけませんが、ただ大きな声で話すだけではいけないことがわかりました。それなのに照れくさい気持ちもあったので、これからの実習や「あそびの森」などを通して経験をし、人前でもうまく話せるようになりたいです。今回はただ話すだけという感じだったので、伝えるということを意識しようと思いました。(K.M)
○絵本を読んだとき、いろいろなシチュエーションでイメトレ的なことを何回もしたのだけれど、いざ子どもの前で本を読んでみると、子どもが思った以上に興奮して、絵本の前に立ったり、大きな声で参加してくれたり、その勢いにびっくりしてしまい，イメトレでしようとしていた対処方法ができず、上手く進行ができなかった。次回は今回の経験を生かして、わざと小さい声で話したり、興奮状態がある程度収まったら続きをするとかの工夫をしてみようと思う。(K.S)

※保育者として子どもたちを集中させることの大切さや、そのための効果的なテクニックについて，今回の反省を生かし，今後もいろいろな機会に学ぶと思われる。

○ 自分たちで計画して、先生という立場に立って保育することがいかに大変で、子どもの心を開く難しさを知りました。途中で飽きてしまって遊具で遊んでいる子とかもいたので、どうすれば興味を持ち楽しんでくれるのかを子どもの立場になって考えることも必要かなと考えました。(A.M)
○「バスに乗って」の遊びで、ハンドルが足りないというハプニングがありました。先輩や他の１年生、先生方に助けていただき無事に進められとても助かりました。ハプニングに対処できるように自分自身が動けるようになりたいと思いましたし、ハプニングが起こらないように、事前にしっかりと人数確認をしておくべきだったのではないかと反省しました。(T.Y)

※保育者は計画から実施に向けていろいろな配慮が必要であることや、子どもの様子を把握し、様々なことに対処できる力が必要なことを実感したと思う。

３．保護者とのかかわりから

○今回の「あそびの森」の体験は幼稚園訪問で体験したこと以上に、自分のためになった。保育というのは子どもだけでなく、保護者とのコミュニケーションも大事であるということを担当した仕事から学び､子どもから学んだ。(K.T)

○内気な子に接したが、話しかけても親の後ろに隠れてしまって、まったく話をしてくれなかった。だけど、親にその子の好きなものやことを教えてもらい助けてもらったおかげで，一言二言会話をしてくれるようになった。その時は本当にうれしかった。だけどよく考えると親に助けてもらわないとそこまでいけなかったのではないかと思った。保育の現場でも幼稚園教諭と保護者のコミュニケーションはすごく大切なのだと思った。(K.S)

※実習では保護者との関わりは経験できないが､「あそびの森」では保護者と直接話す機会が多い。その中で保護者との連携の大切さに気づいたり、連携しながら保育をすれば、子どもにとってよい保育ができることに気づけるよい機会となった。

４．先輩から学ぶ

○先輩は見ている場所が全然違うと感じました。危険予知も最初から考えていたし、実際子どもが遊んでいて危ない！と思うところはすぐに安全になるようにしていたと思います。プログラムの進行にしても子どもたちのことをよく見ながら一つ一つ進めていたし、リハーサルとは違うことが起きても、すぐに対応していました。前半と後半で子どもの様子もプログラムの進み方も大きく違っていた。年齢や発達段階の違いをよく観察したからできたと思います。(M.E)

※先輩の行動を見て、自分たちとの違いによく気づいたと感心するし、また、その分析もできている。年齢が近いだけに学びも大きいし、素直に受け止め、それを目標とする姿がみられる。一緒に行うよさの一つであろう。

○当日に向かって、その１日を成功させるために、２週間前のゼミから先生・先輩が中心となり話が進んでいった。手遊び、絵本、ゲーム遊びなど、幼児教育専攻に入ってよく聞く単語で、授業でもやっているけど、実際に子どもを相手に説明して、実践するということに戸惑いを感じた。説明をするにもいろんな年齢の子がいるし、自分と同年代の子に話すようなわけにはいかないからどうしたら、理解しやすく短く簡単にまとめられるかわからなかった。でも、先輩たちはすごく自然に笑顔で子どもたちに対応していてさすがだなと思った。１年しか違わないのに、実習などの経験でこんなに違うのだと思った。(O.R)

○気分が悪く嘔吐してしまった子がいた時の対応がとても素晴らしかった。先生方はもちろんですが、２年生が何をするべきかを理解していて、その場で自分で判断し、処理をする。人が足りているなら、子どもたちが触ったり近づかないように配慮したり、嘔吐した子への思いやりのある言葉がけや保護者に対しての説明などが十分にされていました。トラブルと思わせない対応、処置がなされていました。(W.S)

※先輩たちが自信を持って「あそびの森」を進めていく姿に、憧れといつかは自分もという思いがわいてきたと思う。実習で育つことのすばらしさも感じたのだろう。１年しか違わない先輩だからこそ感じることだと思う。

○実施にあたって、一番感じたことは２年生が主体的に取り組んでいたことです。それは準備段階から感じられ、プログラム・歌詞の作成・体操・リズム遊びの振り付け確認など、常に１年生に手本となるように率先して行動して、そ

れらがスムーズに「あそびの森」を進行させ、２年生自らも子どもたちと楽しそうに触れ合っていたように見えました。それにつられて１年生も、初めての参加であるのに自然と行動に移せていたようです。（Y.M）

※自分たち一人一人が中心となって進めることの大切さを感じ取ったようだ。きっと彼らが２年生になったときには、それを思い出し自主的に行ってくれると信じる。

＜自分たちで計画実施・２年前期＞

１．「あそびの森」への思い

○今日の「あそびの森」は初めて私たちだけでやって、不安もあったけれど、スライムと小麦粉や手遊びを沢山楽しんでもらえたかな，という感じを受けることができました。午前午後も言えることは，この遊びを通して、友だちと関わることや一緒に楽しむこともすごく見られ、午前ではスライムを自分のものという意識が強くて、分けることを少しいやそうな子もいたけれど、この関わりから共有することや，分けてあげるということを感じてもらえたと思いました。（T.A）

※遊びを進めることに気を配るだけでなく、子どもたちがこの遊びの中で、どのように育ってほしいのか、願いを持ちながらプログラムを進めようとする意欲が感じられ、成長を感じる

２．遊びを進行する上での配慮について

○体操をするときには大きな振り付けに心がけたのでわかりやすかったようだ。また、肩、背中をぽんぽんする前に「次肩だよ！次背中！」などと話しかけたこともよかったようだ。(S.M)

○一部の子だけじゃなくて、何かやっていても周りに目を向けることが大切だと感じました。作ることに集中して、手を口に近づけていることに気がつくのが遅くなったり、一人に集中しすぎて、もう一人の子が投げてきたブロックが当たって泣いている。ということがあって、前にも後ろにも横にも目があるくらいのつもりでいたいなと思いました。（T.A）

※遊びを行うには、活動の流れだけでなく、子どもたちが思いもかけない行動をしたり、保育者の説明でわからないことがあったりするので、細やかな配慮の必要性も実感したようだ。

○小麦粉粘土の説明をしました。頭でイメージできていても、いざ子どもの前に立つと上手にしゃべれなかったです。指導案の大切さを改めて感じました。スライム・小麦粉を作っているときに子どもと一緒にびっくりすることができませんでした。もっと大げさにやれば子どものくい付き方も変わると思ったので、そういうところを考えていきたいです。（U,M）

※まだまだ思うようにはいかないことを実感する学生もいた。しかし、反省点がはっきりしていて今後どのような点を配慮すべきかを分析できるようになってきている。

３．子どもを理解する

○お母さんの後ろに隠れている子がいました。「ブロック遊びをする？滑り台もあるよ」と声をかけても恥ずかしそうにお母さんの後ろに隠れていました。声をかけてもだめだったので、ぬいぐるみを持ってきて、ぬいぐるみを通して声をかけてみると、ぬいぐるみに触ろうとしたりして、少しずつお母さんから離れていきました。この経験から、声をかけてみて反応がなかったら諦めるのではなく、違う方法を考えていろいろと試してみることが大事だと思いました。（I.H）

※最初の「あそびの森」のときには話しかけてもこちらを向いてくれないと，諦めていた学生が、２回目となると実習経験もあり、諦めることなく他の方法を考え、子どもに働きかけようとする姿に成長を感じる。

○午前はスライムで遊んでいると時間が経つにつれて飽きてしまう子がいました。午後はもっとスライムで遊んでもらえるように、自分が感じた感触を口に出して遊んだり、子どもだけで

なく保護者にもスライムを分けて全員で遊べるようにしたりしました。自分では思いつかない遊びも共有できて、時間いっぱい遊ぶことができました。(M.N)

○ずっとお母さんにべったりの３歳のＡ子がいました。僕は慣れてもらおうとＡ子に笑顔で少しずつ話しかけることを心がけていました。しかし、殆どＡ子は話さずに遊びが終わってしまいました。―中略―　あまりＡ子と打ち解けられなかったなと思ってエレベーターに乗っていたら、Ａ子が「お兄さんおったー」と満面の笑顔と大きい声で言って、くっついてきてくれました。その時僕は、すごく嬉しかったです。そして、少し実習への自信にもつながりました。次には子どもの良い所、素直な所をもっと引き出せるような声かけ・接し方を心がけたいと思います。(N.M)

※子どもの様子をよく観察し、一人一人の子どもの動きに合わせて、関わり方を変える保育技術も取得できている。また、ピソード的な記録や分析もきるようになり、２年生になったことを感じさせる。

○スライムの時に、いろいろなグループに違う色のスライムを持っていき、交換をすることをしました。「○色がいい」「○色がほしい」と子どもが言ったとき，私は「任せて」と言って自分一人で取りに行ってました。でも、子ども同士の関わりがこれではなくなってしまうと思い、「じゃあ、あそこに一緒にもらいに行こう」と言って、他の子ども同士の交流を深めることができました。(M.S)

※「あそびの森」は月に１回なので、なかなか子どもたち同士が関わることできない。そこで、少しでも関わることがもてるように、学生自らがきっかけ作りを考えたことや、それを実践できたことは子どもたちに願いを持って接することができるようになった証である。

４．他の学生・グループとの連携

○小麦粉遊びの時に自分のグループ内ではしっかり動くことができたのですが、他グループとの連携が不十分で、手間取ってしまう場面があったので、次回から他のグループもしてもらわなければいけない遊びがあったら、しっかりと連携を取って、全体が効率よく動けるようにも心がけていきたいです。(N.M)

※１回目のときには自分の行動だけしか考えられなかったのが、自分たちで計画実践する２回目になると、他のグループとのことや全体への目配りができるようになってきている。

４．遊びの環境について

○バケツの水で遊ぶとは思ってなかったが、子どもたちは遊んでしまった。早めに遊ばないように伝えるとよかった。また、バケツも手洗い用、足洗用と分けておけばよかった。

※子どもの様子、遊びの内容や指導法には様々なことに気付いても、環境の有り様にはなかなか気がつかない学生たちだが、子どもの姿を見て気付いていくようである。

５．保護者対応について

○小麦粉粘土の時、２歳くらいの男女児２名が取り合いのけんかを始めてしまった。母が「口で言わなきゃわからないよ」と言っても叫んで叩こうとするだけで、子どもたちもお互いに親がいたので、私はどうすればよかった？(S.M)

○親さんがスライムも小麦粉も子どもの服についてしまうのがいやそうでストップをかけている姿をみて、何も言えなかった。汚れるのがいやなのだろうな、けど遊ばせてあげてもいいのになって思った。(S.M)

※まだまだ保護者に対して、どう接して良いかわからない姿が見られる。実習ではこのような親子との触れあいや保護者対応を経験することがないので、とても良い経験をしていると感じた。

＜後輩に指導しながら・２年後期＞

１．子ども理解

○「おまえも行ってこい」と４歳児女児Ｒさんに言う父親がいた。それに対し、Ｒさんは無言で父親の膝の上に頭をのせたりくっつく行動をとっていた。この姿を見た私は、父親は娘に、自分の所から離れ、元気よく遊び遊びに加わってほしいのではと考えた。一方Ｒさんは周囲に知らない子どもや大人が多く、不安や緊張感があり，安心できる父親にくっついていると思い、Ｒさん親子の近くにすわり、「お名前は？」「何歳？」「お父さんと来たのいいね」などＲちゃんに話しかけコミュニケーションを図った。(H.K)

※父親とＲさんの様子をみて、そのときの二人の思いを推し量り、そのために自分がどう働きかけるとよいか思案する姿が見られた。意図性を持って接することができるようになっている。

２．遊びの進め方・保育について

○「おおきなかぶ」の時には何よりも嬉しかったのが、怪獣を描いた子が登場するときに役になりきってくれた事。こちらからの問いかけがあったわけではありませんが、その子自身が絵本の世界に入り込み、その気持ちを存分に出してくれたのでとても嬉しかったです。でも、実はそれはその子の感性です。―中略―本来は自然に子どもたちが役になりきって遊ぶことができるように、環境を整え、声かけなど援助をしなくてはいけないと思います。(T.Y)

※子どものよい姿を見て、よかったと思うだけでなく、そこから自分たちの援助の有り様を探ろうとする姿勢に、４回の実習に裏打ちされた３度目の「あそびの森」の経験が見て取れる。

○子どもの一生懸命さに負けてしまって、うまく時間を持たせることができませんでした。年齢も人数も違うという事を考えた上で様々なパターンを考える必要が有ることを改めて感じました。保育は日々、反省し計画し、という事の大切さを実感しました。反省会の中でもありましたが、子ども主体ではなく、学生主体。子どもの自主性ではなく、学生が子どもたちを連れてこさせてしまうという形が、今回あった気がします。保育の主役は子どもにあることをもう一度考えてみたいと思いました。(T.Y)

○午前の狼とのやりとりやかくれんぼがぐだぐだになってしまったので、午前の事を生かし午後は「狼との追いかけっこか、狼から逃げたり隠れたりすることを楽しむ」ということと「狼とのやりとりをもっと子どもを巻き込んで行う」ことを意識しました。「今の声どう？お母さん？」と聞いてみたりしましたが、子ども主体というより、学生が無理矢理流している気がして、どうかなと思いました。でも、子どもの顔を見ると、扉の向こうに注目していて、楽しそうな顔をしている子もいたので、よかったのかな？と思ったりしました。(Y.H)

※保育は計画・実践・反省の繰り返しと言われているが、学生時代に反省することの大切さを実感できるのも、同じ活動が２回行われることにあると考える。

また、午前の反省をもとに、午後は自分たちなりにねらいを持ち行ったことは、事前に指導案を立てて、保育についての話し合いをしっかり行ったからだと思う。みんなで考え合って指導案を立てたり、実践・反省し、午後にはその反省を基に保育したりする。この方法は実習では経験できないことで、「あそびの森」の特徴といえる。

保育は子どもが主体であり，子どもの思いに添いながら行っていくことが重要であることがわかっていながら，自分たちが引っ張ってしまったという反省ができたことは，保育全体の様子や子どもの動きを掴めるようになってきているからと考える。

○私は体操の説明役を担当しました。私が配慮した点は３つあります。１つ目はゆっくり大きな声で説明したことです。早口で話してしまうと子どもの耳に入らないと考えて、ゆっくり話しました。―中略―２つ目は大きい動きで説明したことです。大げさな位に大きい動きで説明しました。３つ目は説明した後に、説明した内

容を子どもに質問しながら確認したことです。１回の説明ではわからない子もいると考えて、確認するようにしました。また、私が話してばかりでは、子どももつまらないと考えて、子どもに質問しながら確認する方法をとりました。(N.M)

※実習でこうするとよかったなと感じたことを試すチャンスとして「あそびの森」に取り組んだと思う。失敗を基に自分なりに３つの方法を考え出し、実践し、それを反省する。保育者として反省・計画・実践・反省･･･と続けることはとても大切なことであると共に、こうすることにより、保育者としての実践力・保育力を高めることにつながると考える。

３．環境について

○「えほんの森」に移動するとき体操のカセットを忘れてしまいました。絵本の読み聞かせをしている間にカセットを取りに行って体操の時間に間に合ったけれど、忘れないようにずっと持っていたり、どこにあるのかをきちんと確認しておけば、カセットを忘れることもないと思いました。(S.S)

※用具や用品等の準備をしっかりすることが、保育を進める上では欠かせないことを、身をもって経験したようだ。この経験を生かし、今後同じ失敗をしないように、環境準備に配慮すると思う。

４，保護者との関わり

○４・５歳児くらいの女児を２人連れた親子が来ました。私が画用紙とクレヨンを渡して「動物は何が好きかな？」と聞くと２人とも恥ずかしそうにしていました。保護者が「どんな動物描こうね？」と聞くと、子どもたちは「猫を描く」と答えてくれました。絵を描き始めると２人とも「お母さん、猫ってどうやって描くの」と保護者に聞いたり、「お母さんが見ててくれなきゃ描けない」と２人でお母さんの取り合いになってしまいました。保護者が２人の要望に応えようとしている姿を見て、私は「○○ちゃん、この猫上手だね」と声を掛けるのですが、なかなか振り向いてくれませんでした。子どもたちが保護者を通して私と楽しく絵を描いたり会話が出来たらいいなと思ったのですが、難しさを知りました。(I.H)

※保護者がいる場合、実習のような接し方ではだめなことを学んだようだ。それでも、さすが２年生だと思われる行動は、子どもと保護者との強い関係を見ても、諦めずに子どもたちに接しようと、あの手この手でぶつかっていく姿勢である。保護者と子どもの関係を見ながら、自分がなすべき事はと考えられることが、今後、子どもと接していく上で大切なことである。

５．チーム保育・友だちの姿から学ぶ

○Ｔさんはとても細かいところまで気付け考えられるということに気付けた。プログラムの改善点はほぼＡさんが気づき、変更案を出してくれた。Ｍさんは計画実施でリーダーシップをとり、自ら嫌な仕事を引き受けてくれた。Ｕさんは人前で話すのが苦手だからパネルシアターをしたいという思いがあり、そのために行動していると思った。(H.K)

※実習では他の学生の様子をみることがない「あそびの森」だからこそ友達から学ぶことができる。保育者になったときには、他の保育者から様々なことを吸収しようとする姿勢がとても大切である。そういう力も育ってほしいと願う。

○午後、私は手遊びの担当でした。「肉まん」の手遊びをするつもりでいましたが、午後の前半のグループが同じ手遊びをするという、私たちがお互いに何をするのか把握していないトラブルで、急遽「ディズニー」の手遊びに変えました。―中略―どのグループが何をやるのかをちゃんと伝え合うことの必要さをすごく感じました。

※グループに分かれ、それぞれ役割を分担するが、時間的なことと学生の意識の問題

で、互いに細部にわたっての打ち合わせが出来ていないことの不備に気がついたようだ。今はチーム保育を大切にする時代である。他の保育者との連携を図らないと保育が進めていけないことに気付いたことは、保育者としての力となると感じた。

6．後輩指導

○１年生のN君がなかなか子どもと関わることができず、離れたところで座っている姿を多く見た。そのため「あの子一人だから声掛けてみたら？」や「あそこの遊びに入って一緒に遊んでみたら？」と声は掛けたのですが、頑張って近づこうとする姿は見られたのですが、それでもまだ、子どもと話ができる距離まで近づけずにいる姿が、１日終わるまで見られた。―中略―　今後彼がどう子どもと関わっていくのか、関われるように変わっていくように支援し、見守りたいと思った。(H.K)

○入ってきたお子さんと、さっと関わることができていたのは２年生でしたが、それを見て勇気をだして関わろうとする１年生の姿があったので，私たち２年生が模範となるような動きを率先して行わないといけないと感じました。(K.M)

※後輩指導は、２年生の大切な仕事である。保育を進めていくことだけでなく、子どもとの接し方についても後輩の指導を行っている。ゼミの授業の１年半の間に、自分たちも先輩に指導してもらって成長してきている実感があるからこそ、自然体で後輩指導が出来るのだと思う。保育者になったとき、この先輩後輩の関係は大きな意味を持つ。よい経験の場だと思う。

Ⅳ　保育者の力量形成の視点からの検証

Ⅲでは学生による感想を基に、体験時期と力量形成の機会との関わりについて整理した。以下では、Ⅲでの整理をもとに、「あそびの森」が体験時期によって力量形成のいかなる機会となったかについて、機会の質の変化に注目して論じたい。

1．子どもとの関わりづくりからの発展

まず指摘できるのは、１年生の時期には子どものとの関わりをつくることの難しさという課題に直面する機会に「あそびの森」がなっており、それが２年生になると、一歩踏み込んだ課題に直面する機会になっていることである。

実習を未だ体験していない１年生の多くにとっては、「あそびの森」が保育する立場で子どもと接する初めての場となる。そのため、１年生の多くにとって、やってきた子どもにどうやって声をかけていいのかわからないなど、目の前にいる子どもとの関わりのつくり方が課題となっている。例えば、学生 I.H は、感想の中で「前半では自由時間の時に子ども達がやってきても声をかけずにずっと窓の方に座ってい」たことを振り返っている。

これが２年生の段階になると、子どもへの働きかけ方の工夫をする機会になっていることがわかる。例えば、上述の学生 I.H は、母親の後ろに隠れている子どもに対し、すべり台に誘ったり、ぬいぐるみを使って声をかけたりするなどしており、異なる方法を考えて試みることの重要性を感想に記している。このように、１年生の段階では子どもとの関わりのつくり方がわからないという課題に直面していた学生であっても、２年には一歩踏み込んで、子どもへの働きかけ方の工夫をするようになっていることがわかる。

また、子どもに何かを伝える場面においても、１年の時には子どもにわかりやすい言葉がけや楽しい言葉がけに重点が置かれているが、２年になると、例えば「ゆっくり大きな声」「大きな動作」「繰り返しての説明」の３つの配慮を行った N.M のように、言葉の内容だけでなく言葉の伝え方にまで工夫して、それを実践する機会になっている。

次に指摘できるのは、「あそびの森」を経験する中で学生が、子どもにどのように育ってほしいかという願いを持って保育に臨むようになっていることである。１年のときには、自分

の与えられた役割を果たすことや、その中で子どもに楽しい遊びを提供することに学生の意識が向けられている場合が多い。これが２年生になると、前期の T.A の感想からわかるように、子どもに対する願いを持ちながら目的的に保育を行う姿が見られるようになり、自らの願いを持って保育に臨む機会へと変化していることがわかる。

この点と関わって、遊びを子どもたちに提供する中で、子どもたちの人間関係づくりに取り組もうとする姿が見られるようになっている。初めての「あそびの森」では自身の役割を果たすことと、学生と子どもとの関係をつくることに重点が置かれることが多い。しかし２年生になると、例えば２年前期の M.S のように、活動を進めながらもその中で子どもたちの関係をつくるように働きかけを行うようになっている。

このように、「あそびの森」は子どもとの関わりづくりという初歩的な課題に直面する機会であることを出発点としながら、（１）働きかけの工夫を行う機会、（２）願いをもって保育を行う機会、（３）子ども同士の人間関係づくりを実践する機会へとそれぞれ発展していっていることがわかるのである。

２．個人の保育からチームの保育へ

２年生の段階では、１年生の頃と比べて、学生同士が連携してチームで保育を行おうとする姿勢が強くなっている。１年生の段階では、子どもとの関わりづくりや活動中の子どもへの説明、言葉がけなどに意識が集まることが多い。２年生になると、そうした意識は引き続き持ちつつも、例えば、小麦粉ねんどの時に「他グループとの連携が不十分で、手間取ってしまう場面があった」と反省したり、プログラムを考える上でグループ間の連絡が行き届いていなかったことから「どのグループが何をやるのかちゃんと伝え合うことの必要さをすごく感じました」とグループ間の連携についての反省を記したりする学生が出ている。

これは、１年生では子どもとの関係をつくることに意識が向きやすいことと、２年生が主導して活動全体を進行するため自分自身に与えられた役割にのみ意識が向かいやすかったのが、２年生になって自身で主導して活動を進める立場になることで、他グループとの連携などに意識が向かい、結果として「あそびの森」がチーム保育を行う力量形成の機会となっているのではないかと考えられる。

３．先輩から学ぶ体験から後輩へ伝える体験へ

１年生にとっての「あそびの森」は、子どもとのかかわりの中で保育の力量形成を図るだけでなく、２年生とのかかわりの中で保育の力量形成を図る機会にもなっている。上述の学生 I.H は、午前と午後の間の反省会の時に、自由時間の時に声をかけておくと活動の時間の時に抵抗なく子どもたちが遊んでくれるとのアドバイスをもらっており、午後の時間はできるだけ子どもに声をかけるようにしたと振り返っている。また、直接アドバイスをもらうだけでなく、２年生の姿を見ることを通じて学んでいる場合もある。学生 M.E の場合、２年生の危険予知やプログラムの進行の仕方などから学んでおり、学生 O.R も子どもへの対応の仕方を２年生から学んでいて、２年生の保育を間近で見ることが、２年生の保育の力量形成にとって意味ある体験になっていることがわかる。

また、２年生と共同で行う中で２年生に頼ってしまった体験が、もっと自分でやれるようにならなければならないという姿勢につながっている姿も感想の中に見ることができる。「あそびの森」を２年生と共同で取り組むことが、保育技術だけでなく保育者としての姿勢を考えさせる機会ともなっていることがわかる。

これが２年後期になり、先輩という立場で１年生と「あそびの森」に取り組むようになると、後輩指導への意識が芽生えている。特に、「さっと関わることができていたのは２年生でしたが、それを見て勇気をだして関わろうとする１年生の姿があったので、私たち２年生が模範となるような動きを率先して行わないといけないと感じました」という学生 K.M の振り返りからは、１年生が２年生を見ながら学んでいくことを意識しながら、保育に取り組もうとする姿を看取できる。こうした２年生の先輩としての姿が、

１年生が２年生から学ぶ機会を作り出していると考えられる。

以上のことから、「あそびの森」は、保育者と子どもとの個々の関係をつくる力量形成の機会から、働きかけの工夫をしつつ子ども同士の関係をつくる力量形成への機会へと変化していること、子どもと学生との間の個々の保育から同級生との横の関係の中でチームとしての保育の力量を形成する機会へと、体験の質が変化していることがわかる。このように「あそびの森」は、体験時期に応じて質の異なる体験の機会を学生に提供しているのである。特に、Ｉで示した保育者の力量形成にかかわる五つの要素と照らし合わせると、（１）幼児理解、（２）保育をつくる力、（３）保育者としての有り様、（４）チーム保育の力の四つの要素の力量形成の機会となっていることがわかる。

４．力量形成の機会としての課題

ただし、「あそびの森」を保育者の力量形成の機会として見た場合、以下の二点については課題が残っていると考えられる。

第一に、「保護者との関わり」についてである。保護者との関わりについては、保育実習ではなかなか体験できないため、貴重な体験の機会を提供する可能性を「あそびの森」は有している。学生の中には「あそびの森」の中で保護者との意識差にとまどう経験をしたものもあったが、全体として保護者との関わりや連携についての意識は薄い。これは、「あそびの森」が一カ月に一回の取り組みであり、また学生にとっても半年に一度の参加なこともあり、継続的に保護者と関わる機会とはならないため、保護者を巻き込んだ形での保育という意識になりにくいのではないかと考えられる。例えば、幼児理解を深めるためには、子どもとの関わりが重要なことは当然であるが、保護者と連携しつつ多面的に子どもの様子を知ることが必要である。そうした保護者との関わり・連携について学ぶ重要な機会に「あそびの森」はなりうることから、学生への意識づけが必要である。

第二に、環境構成についてである。五つの要素の中の「保育をつくる力」に関連して、計画―実践―反省というプロセスをたどりながら保育をつくるという点に対しては学生の意識がよくむけられている。しかし、環境構成については、活動を円滑に進めたり、子どもたちに楽しい活動を提供したりする上での道具の準備などには意識が向かうものの、活動内容とは直接の関係がないところでの環境構成については意識が薄くなる傾向にある。これは、一日限りの保育であるため、活動の内容に意識が向きやすくなることや、保育に使用する部屋が学生にとっては予め整備された部屋であるため、自分たちで環境構成を行うことができるという意識が芽生えにくいことが要因としてあるのではないかと考えられる。そのため、子どもとの直接的な関わりや活動の部分だけではなく、子どもたちの成長・発達を保障するような環境構成をいかに作り出すかという点に、学生の意識を向けていくような取り組みが教員の側に求められると考えられるのである。

Ⅴ　今後の課題

以下、今後の研究課題についてまとめておきたい。

本稿で、「あそびの森」が学生の力量形成に対して体験時期によって質の異なる体験の機会を提供していることが明らかになったが、特に保育者養成段階における力量形成の視点から見た際に注目されるのは、先輩から学ぶ１年生の姿である。

それまでに保育者として保育に携わった経験がない１年生にとっては、子どもとの関わりの作り方もわからないという中で、２年生の保育に取り組む姿や直接的なアドバイス、あるいは２年生に頼ってしまった経験が、学生が保育者としての力量を形成する機会となっていることは、すでに指摘した。ここから想起されるのは、レイブとウェンガーによって指摘された正統的周辺参加論である。

正統的周辺参加論では、正統的な実践的共同体に参加しようとする初心者の「私」と、社会的・文化的実践の中心的活動との間で折り合いをつける周辺的活動の持つ意味に注目する。「あ

そびの森」で１年生が２年生に頼りつつも保育者としての技術や有り様を学んでいく姿は、まさに周辺的活動に取り組みながら中心的活動の担い手へと変わっていくことを実証していると思われる。そのため、この１年生での「あそびの森」での体験に注目して、正統的周辺参加の持つ保育者養成上の効果について明らかにすることが今後必要となるものと思われる。

また、こうした実践的活動のカリキュラム上の位置づけについての検討も必要である。今回検討した学生の感想からは、テキストに書かれた内容を思い出しながら、実際の子どもの様子を見て確認している学生の姿があった。また一方では、「あそびの森」の中で課題と直面する中で、新たな知識や技術の必要性を認識する機会となっている可能性も考えうる。そのため、「あそびの森」のような実践的活動と講義系科目の関連についての検証が、今後の課題として残されている。

〈参考文献〉

・ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー（佐伯胖訳）『状況に埋め込まれた学習　正統的周辺参加』産業図書、1993 年。
・田中俊也「状況に埋め込まれた学習」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社、2004 年、pp.171-193。

（本稿は、古里と三羽で検討を行った上で、Ⅰ、Ⅳ、Ⅴを古里が、Ⅱ、Ⅲを三羽が執筆した。）